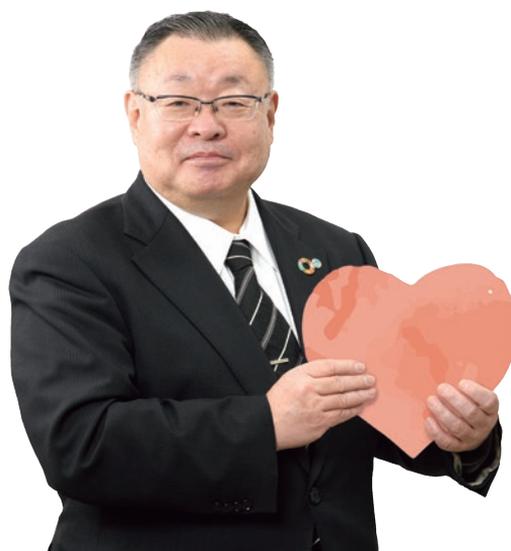


世界は今、「気候危機」に瀕している!?

昨年末に国連気候変動枠組条約第28回締約国会議(COP28)が開催され、2015年の「パリ協定」にもとづき、各国が定めた温室効果ガス排出量の削減目標に対する2021～2023年の実績検証が「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第6次評価報告書」をもとに行われました。「パリ協定＝世界的な平均気温上昇を産業革命以前に比べて2℃より十分低く保つとともに、1.5℃に抑える努力を追求する」を受けて、日本は「2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、カーボンニュートラルを目指す」と宣言し、中間目標として2030年46%減としています。IPCCの報



気候変動対策、今、「選択と行動」の時

告では「世界の脱炭素化の転換スピードは全く足りていない。そのための投資も全く足りていない」「インフラや社会システムが化石燃料依存のパターンから抜け出せていない」と指摘しています。さらに「脱炭素化の転換に必要な(GX推進の)資金も、技術の大部分も、人類は持っている」とし「社会の『調整スピード』を上げる必要がある」と訴えています。

2023年の世界の年間平均気温は、1850年の観測以来、最も暑い年となったと欧州連合(EU)の気象情報機関が1月に公表しました。産業革命前と比べると、パリ協定の「1.5℃目標」に迫る1.48℃とギリギリの水準でした。年間のすべての日で初めて1℃を上回ったほか、年間のほぼ半分の日で1.5℃を上回り、11月には「2℃」を超える日が2日あるなど、まさに「地球沸騰の年」だったと示されました。もはや単なる「気候変動」ではなく、人類や全ての生き物にとっての生存を揺るがす「気候危機」に瀕しています。

石器時代が終わったのは、 石が無くなったからではない!

『異常気象と人類の選択』などの著書がある江守正多氏によると、「『脱炭素化』はしぶしぶ努力して達成で

きる目標ではない。それには、社会の『大転換』が起きる必要がある」と述べています。社会の仕組みが変わること、人々の常識が変わることが求められるということです。江守氏は「大転換」の事例として「分煙革命」を挙げています。受動喫煙による健康被害の立証→「嫌煙権」訴訟→健康増進法→分煙・禁煙飲食店の主流化…この常識の変化が30年で達成できたのは、まさに「分煙革命」だとしています。

「石器時代が終わったのは、石が無くなったからではない」…これは20年以上前、世界が石油依存からの脱却に舵を切ることに對して、サウジアラビアのヤマニ元石油大臣が石油産出国としての危機感から発した言葉です。石器時代を終わらせたのは、青銅器や鉄器などの高い性能や機能を持つ道具だったということです。江守氏は「少し前までは、化石燃料が枯渇する心配をしていた。最近は『たくさん余っているのに使うのを止める』ことを目指し始めた」とし「人類は『化石燃料文明』を卒業しようとしている」とまとめています。「選択と行動」の時です。気候危機が進行し、対策は一刻の猶予も許されない状況の中、一人ひとりが自分事として真剣にできることから取り組んでいきましょう。